四月号は選挙のため日誌を休んだ。また続ける。

三月十八日　早通、下土地亀両小学校の閉校式。発展的解消とはいえ、母校がなくなるのはさびしいだろう。私の母校嘉山小学校、葛塚農商学校ともに今はなく、同窓会も自然解消して久しい。早通、下土地亀両校には記念碑が建てられた。これは長く残る。ここに学んだ思いをいつまでも大切にしてほしい。農商学校の跡地である今の市役所用地は、組合立葛塚高等小学校、町立尋常高等小学校、郡立新発田農学校葛塚分校、町立青年学校、中学校、県立新発田商工葛塚分校と、七校のあった歴史の地である。全校の卒業生共同で記念碑を建てたいと思うがどうだろう。

四月十日　合田新介著、思想の科学社発行の「木崎農民小学校」と、木村春作著、集英社発行の「さらば国境よ」の寄贈を受ける。初版は少ないので書店にないかもしれない。読みたい人は書店へ注文してほしい。作家木村春作さんは松浜の生まれ、元県教育庁職員で私の友人。今は潮来で創作にはげんでいる。「さらば国境よ」は木崎争議を背景にした小説で、集英社創業五十周年記念一千万円懸賞小説の入選作。数年前私のところへ取材にきたことがある。

五月四日　三十四年ぶりに訪問した疎開学童を市役所の玄関で迎えた当時の級友たち、重な市民の歴史になる。この計画についてご意見をおきしたい。

拍手と花束で迎えられる初登庁の石井市長

五月六日　大迎の浄応寺の住職護山孝舜さんが亡くなられた。今良寛と言われていたが、良寛さまよりは社会性をもち、教化、社会福祉、青少年健全育成などに生涯をささげた。公職何年などという基準でなく熱六等を拝受しておられる。ご冥福を祈る。

五月十日　市民講座開講式。受講者は年ごとに多くなり、科目によっては希望に応じきれないとのこと。高度経済成長の時代は過ぎた。これからは豊かな教養を身につけ、合理的な生活を営む時代だというが、市民の意向もそこへ進んでいることがわかる。今年も大学講座を開設する計画を進めている。それにも多数の受講を望む。

やあ!おげんきですか

第二十回日報詩壇賞受賞

星　可規さん（早通南五）

市内には文化人や文芸に優れている人が多くいます。今回の星さんもその一人。

――日報詩壇賞とは

「新潟日報社で毎年春秋の二回、県内から寄せられた優秀な詩作品に贈られるものです。今回の選考対象は昨年四月から、この三月までの一年間日報読者文芸〝生活詩〟欄に入選した作品です」

――新聞で、星さんの名前によく、お目にかかりますが、何と読むのですか

「みなさんから、よく聞かれます。〝ほしきくのり〟と言います。これは本名です。〝ほしかき〟とか〝干し柿〟からほしがき〟などと言われます。父がちょっと名前に凝っていましてね。兄弟の名もそうです」

――受賞の感想について

「うれしいですね。立派な作品が多かった中で、私のような新人がもらうなんて…きっと新人を励ますためなんでしょう。それにしても選者の山本先生が過大なる評価をしてくれるんで大変恐縮しています」

受賞の喜びを語る星　可規さん

――いつごろから詩を。

「本腰を入れたのは昨年の春からです。若い時から興味を持っていましたが、書いていません。だから、これからなんです。」

――どんな時に〝ひらめき〟が

「ひらめきなんてありません。私は新潟市の精神病院で看護士をやっていますが、患者に対しての適和感や偏見はありません。だから仕事場でフイッと浮かんだり、家で子供が寝てからイメージがつくられたり様々です。身構えるものではないと思います」

――詩人とは繊細感覚の持主では

「いやいや、とんでもありません。他人と同じです。人を愛し、酒を愛しです。妻は〝変人〟とかいいますが、どういう意味かわかりません。（笑）」

――今後は

「詩というものはリズムがあると思いますし、単なる言葉遊びではなく、なくてはならないものを造形するということです。だから、その辺にポイントを置き、ボチボチ書いていきたいです。酒を飲んでいる時は空間をつくってくれますが、良いものはできませんね」

新聞のチラシを脇におき

「これ一番よいです。感じるままに、ボールペンを走らすんですよ」

早通南五に住む四十歳。奥さんと子供二人の家庭。

市長の日誌

石井新一

土地の出は語る

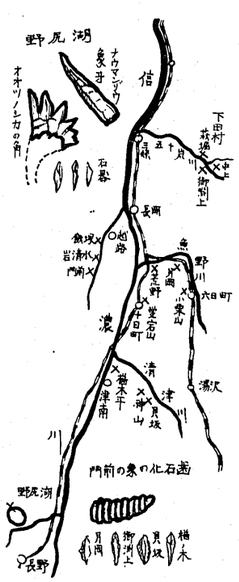
(13) 縄文時代

信濃川の上流、野尻湖の湖底から約二万年前のナウマンゾウやオオツノジカの化石が、ナイフ型の旧石器といっしょに発掘されました。旧石器時代の狩人は、手に手に、石のナイフで木や、骨をけずって作ったやりなどの武器を持って四方からバッタのようにとびかかって倒しました。千曲川は魚沼に入って信濃川となりますが、その支流渋海川のほとり越路町の門前と飯塚から象の化石歯が発見されました。又岩清水の青白色粘土地帯に小柄な原始的直牙象やさくだ其他哺乳類動物の足痕が発見されて、中村孝三郎氏が「蕃い足痕」と題して発表しました。魚沼や下田村や蒲原の旧石器人が狩の対象としたかは、わかりませんが、河原を象やらくだがノッシ、ノッシと歩き廻っていたことは事実です。

氷河時代のきびしい、自然とのたたかいもいよいよ終りとなりました。くる年もくる年も気温は上昇し、高い山山の氷河もとけはじめ、海は次第に水かさを増してきました。それまで大陸と地続きだった日本は北海道が西南は九州が大陸からはなれ、現在の日本列島ができあがりました。大陸からはるばる日本をめざして長い旅をしつづけてきたナウマンゾウの群れも、そしてゾウを追ってやって来た人達も完全にその道をとざされました。新潟付近でも大陸棚の大部分は陸で粟島まで陸つづきでしたが、低い平野は水に没して村上から弥彦、角田まで大きく入りこんだ湾になり新発田、新津、三条、長岡が海の底になりました。又此頃火山活動が盛んで、焼山、妙高山、黒姫山が大爆発を起しました。角田山の噴火もこの頃ではなかったでしょうか。角田山の項上には安山岩の溶岩があり、間瀬海岸にまくらをつみ重ねたように見えるので「まくら状溶岩」といわれる天然記念物があります。

約二百万年もつづいた旧石器時代も終り、縄文時代がやって来ます。旧石器人がそのまま縄文人になったのか、それとも亡びてしまったのかわかりません。日本最古の土器は昭和三十六年愛媛県上黒岩で発掘されました。水田の苗しろに使う土をとるために、自宅の近くの岩かげを六メートル掘り下げたところ古い土器の破片をみつけました。アメリカのミシガン大学で放射性炭素測定の結果、いまから約一万二千年前のものだということがわかりました。それは日本でもっとも古い土器の破片であるばかりでなく世界最古のものともいわれていますが、土器が日本に生れたものか、それとも大陸からきたものか、わかりません。

―畠山佑二　記―



はしの話

(2) 堀田橋

〝暴れ川〟の異名を持つ駒林川。そこに架かる市内で一番上手にある堀田橋。今回は堀田橋を紹介します。

今春まで十四年間も上堀田の自治会長を務めた曽我文雄さん（六八歳）は

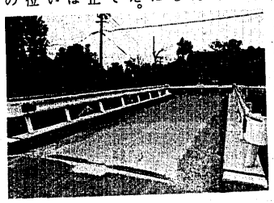
「水あびや魚を採った愛着のある駒林川なんです。小さいころ、台所からご飯粒をもっていって釣るんですが、朝めし前に二串ぐらいのフナが釣れてねえ。それはうまいフナだったさ。今は洗剤の匂いがして駄目だろもねえ。ほかに川ガニやうなぎなども採れたんでね。」

同席の曽我邦夫さん（五六歳、上堀田）は

「堀田橋は以前、現在の橋より百メートル下手のポンプ場のところにありまして、荷車がやっと通れる位の木橋でした。荷車が来ると狭いもんだからランカンの上にあがるんですが、うまくいかず川に落ちることも度々ありました。だって幅が六尺ぐらいの橋でしたからねえ」また、星野正也さん（六三歳、下大口）は

「私は現在、葛塚に住んでいますが、ここらは毎年二回位必ず水が出ましてねえ。この橋は昭和十二年ごろ、現在地に架かったのですが、戦争のため軍靴で渡ったらタンタンといい音がひびくんですよ。また、名目所（新潟市）の船頭が船で砂利を運んできたり、新潟の川まつりには部落中で船に乗って新潟まで花火見物に行ったりで思い出がありますわ」

「この橋の上でバッチをやったり、ホタルを見たり、夏になると青年達の社交場だったりで、年頃の女ご衆なんか恥ずかしがって通らんねかったねえ。二十八年に永久橋となり、一昨年、今の橋ができたんろも、高くなって、冬場になると車がスリップし危くって、川の改修が進むと川は深く、まわりに木はなくなり水の事故が恐くてねえ」と曽我文雄さん。川、橋ともに変化したものです。



写真は、現在の堀田橋